

御馳走様でした！

ミシエル・シンタベラ

日本語・日本文化研修留学生 インドネシア

「日本の生活にはもう慣れましたか？」とある人が私に聞いた。その時は日本に来てから5か月が過ぎていた。

「慣れましたが、やっぱり和食にはまだ慣れていません」と私は正直に答えた。和食は嫌いなわけではないが、幼いころからインドネシア料理で育てられた私は、どうしても国の料理から離れないのだ。

交換留学生として和歌山で暮らし始めてから、今ではもう7ヶ月も経った。甘い有田ミカン、壮観な和歌山城、部屋からみるきれいな夕焼け、そして私と和歌山弁で話した後、私がインドネシア人だと知って笑ったおばあちゃん。

ある日、「旅行はどうだった？」と私は外国の旅行から帰ってきたクラスメートに問いかけた。「和歌山とは比べものにならないかったさ。和歌山に住んでいてよかった」というのが彼女の答え、そしてうなづいた私。

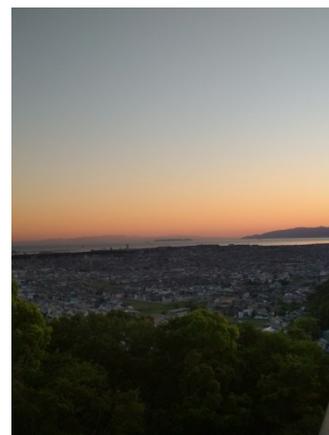
今年、元日に家族から離れていた私を、一緒にお節料理を食べようとある日本人の家族が誘ってくれた。卵、黒豆、牛蒡、お雑煮などを一緒にいただいた。食べ物で争う2人の兄弟を見ていると、私もある小さなレストランで弟と肉で争ったことを思い出した。

先月、教会の野外礼拝に参加したときのことだ。あるおばあちゃんがわざわざ私のためにお弁当を作ってくれた。唐揚げ、卵、ミートボール、こんにやく、ソーセージ、ハム。小食の私だけれども、あの時、意外とたくさん食べられた。学校に行く前にお母さんが作ってくれたお弁当を思い出したからかもしれない。国が違っても、母親の役目はいつでも同じで、家族を守ることだと思う。



野外礼拝のお弁当
家族に会いたくなった。

おせち料理を食べようと誘ってくれた家族、野外礼拝のお弁当、また、ルームメイトが作ってくれたフライドポテト、食堂でおばちゃんたちが作ってくれる朝食と晩御飯、そして友達が作ってくれたたくさんの食べ物。和食にはまだ慣れていないが、作ってもらった食べ物や小さいことにもちゃんと感謝すべきだと思う。人は良く食べないと考える力もなくなり、眠れなくなり、人を愛せなくなると言われている。他人が作ってくれた食べ物を思い出すと、私が日本でここまで頑張ってきたのは、出会った皆さんが作ってくれた食べ物のおかげだと思う。



部屋からみられる景色